

開始後に中止を決定した。模擬イベントの振り返りを「海面班」と「陸上班」に分かれて実施し、講師による指導及び講評を行った。

9月28日（木）29日（金）には、模擬イベントの振り返りをもとに、「海面班」と「陸上班」に分かれて改善点および改善方法を整理した。また、生徒個人での振り返りを実習レポートにまとめた。

7 効果および課題

「シーカヤック体験乗船会」の参加者を対象にしたアンケート結果について、「シーカヤックの指導は分かりやすかったか（4段階評価）」に対する回答で最も評価の高い「4」の割合は、6月および7月でそれぞれ75および100%となった。これは、「海面班」生徒の感想に、「6月の反省を生かして7月に臨んで、考えた（改善策）とおりにできてよかった」という感想と一致していた。「受付、誘導等の対応はどうだったか（4段階評価）」に対する回答で最も評価の高い「4」の割合は6月および7月でそれぞれ88及び90%となり、参加者にほぼ満足されたと考えた。

「今後シーカヤックとどのように関わりたいと思うか（「糸魚川市でシーカヤックに乗りたい」「他の地域でシーカヤックに乗りたい」「知人等にシーカヤックを勧めたい」「もう乗りたくない」から複数選択可）」に対する回答は、6、7月の合計で、「糸魚川市でシーカヤックに乗りたい」、「他の地域でシーカヤックに乗りたい」、「知人等にシーカヤックを勧めたい」

「もう乗りたくない」でそれぞれ、89、50、61及び0%となった。「糸魚川市でシーカヤックに乗りたい」「知人にシーカヤックを勧めたい」の割合が高いことから、「シーカヤック体験乗船会」参加者は、シーカヤックに乗るために糸魚川市に再び来訪することが予想され、同体験乗船会は地域の活性化に有効であることが明らかになった。

昨年度から体験乗船会の企画・運営のための打ち合わせや参加者への対応をする生徒の様子を観察して、コミュニケーション能力が向上したと考える。「企画・運営について仲間と議論したり、初対面の人に安心してシーカヤックを楽しんでもらえるように話しかけたりする、コミュニケーション能力が向上した」「人前で話すことに苦労を感じたが、その経験が自分を成長させたと思う」「自分から意見を出し、行動できるようになった」という感想から、生徒もコミュニケーション能力が向上したことを認識できたと考える。

また、「3年間の一貫した活動を通して、参加者側と主催者側、両方の立場で考えられるようになった」「イベントを複数回実施していくなかで、改善していけてよかった」「計画的に取り組む力がついた」「グループをまとめる力がついた」という感想から、「異なる立場の考え方を整理して最適解を導き出す力の向上」「PDCAサイクルを回して改善する力の向上」「計画性の向上」「統率力の向上」があったと考えた。

加えて、「東京海洋大学海街コミュニティ・スクール」の研修生の引率でイベントに参加した佐々木教授が、同コミュニティ・スクールで学ぶ子どもたちが海の楽しさや重要性を学ぶためにとても良い活動」と感想を述べていた。本体験乗船会は、中学生以上を対象に行ったが、体験内容を工夫することで、シーカヤックが小学生の教育を目的とした交流人口の創出につながる可能性を考えた。

2年生の「シーカヤック体験乗船会」模擬イベントは悪天候のため、途中で中止となったが、イベントの実施に至るまでの過程で主体的・協働的に課題を解決する探究的な学びを行うことができたと考える。課題としては、シーカヤックの漕艇練習の時間を増加することが必要と考えた。

8 今後の展開

「シーカヤック体験乗船会」の企画・運営が生徒の「コミュニケーション能力」や「異なる立場の考え方を整理して最適解を導き出す力」の向上に有効だと明らかになった。また、能生海水浴場で「シーカヤック体験乗船会」を実施することが糸魚川市の交流人口拡大に有効だと考えたため、「シーカヤック体験乗船会」の企画・運営の取り組み及びSea to Summit等地域のマリンスポーツイベントの運営への参画を継続し、生徒の能力向上を図り、マリンスポーツによる地域振興に貢献していきたい。

教育プログラム名【マイスター・ハイスクール進路講話】

マイスター・ハイスクールCEO 松本 将史

1 実施目的

個人の権利や自己実現が保障され、身体的・精神的・社会的に良好な状態にあることを意味する「ウェルビーイング」の概念を理解するとともに、様々な業界で活躍する講師から講話をきくことで、自己の生き方・在り方を考察し、キャリア形成に対する動機付けをする。

2 日時・場所

第1回 令和5年 7月5日(水) 5・6限 第一体育館

第2回 令和5年 11月8日(水) 5・6限 第一体育館

3 対象学年・コース・人数

全校生徒

4 講師

第1回 合同会社シーベジタブル 共同代表 蜂谷 潤 氏

第2回 ブルーラグリーンジャパン 代表 吉田 宏司 氏

5 実施内容および成果

(1) 第2回「海藻で海も人もすこやかに」

温暖化を含めた我が国沿岸の海洋環境が変化するなか、海藻類は激減して海の生産力が低下し、海藻食文化も衰退している。合同会社シーベジタブルは、磯焼けで資源が急速に減っている海藻類の陸上と海面での養殖技術を開発し、海藻の新しい食べ方を提案しながら海藻資源を守る事業を展開している。

講師からは、合同会社シーベジタブルの養殖事業や海藻加工品製造事業、レストラン事業の詳細を紹介してもらいながら、同じ目標に向かう志の高いスタッフの集め方や働き方についての考え方を教えてもらった。



講師紹介



講話後も詳しく話を聞きたい生徒が集まる

事後の生徒アンケートには「好きなことに没頭していることが仕事になっていて格好良い」「自分で開発した技術で会社を作って従業員を雇っていることがすごい」「日本中の海を潜って海藻を調べることを仕事にしている人が社員にいと聞いて驚いた」等の記載があり、身近な大人がしていないような働き方や仕事に対する考え方をしている人の取組に驚いたり感動したりしていた。講話後も個人的に講師と話しをする生徒が後を絶たず、ベンチャー企業を軌道に乗せた経営者の考え方を学ぼうとする意欲が感じられた。

本校もイシモズクの生育域調査を行っているので、今後海藻に関わる探究学習において専門的な知見を伺える関係が築ける良い機会となった。

(2) 第2回「人間と自然との調和」

約 600 人が所属するダイビングスクールを主宰していた講師が、ミクロネシア連邦トラック環礁内の沈船ダイビングのガイドをきっかけに、現地の方より周囲徒歩3分の無人島「ジープ島」を譲り受けるところから始まる珍しい人生の話をしてもらった。今では「ジープ島」に観光客を送客する事業を展開するとともに、数年前から上越市の実家に戻って妙高地域を中心に人と自然との調和を目指す自然塾を運営している。

小さな夢の実現が大きな夢を叶えることや人から喜ばれることが人生最大の喜びであること、小さなことでも良いので人に与えること等の考え方を教えてもらった。事後の生徒アンケートには「小さなことでも良いので行動することが大事だと思った」「一所懸命取り組んでいると様々な人の出会い生まれるものなのだったと思った」「仕事を頑張りつつ、ときには自然に戻るスローな生き方も必要だと思った」等の記述があり、講話タイトルに込められた講師の考え方が生徒にも理解されたようであった。



生徒は、講師が外国の無人島所有者であることに驚く



活発な質疑応答

教育プログラム名【ポスター発表月間および成果発表会】

マイスター・ハイスクールCEO 松本 将史

1 実施目的

水産・海洋関連産業や地域の課題解決に専門性を活かして取り組んでいる様々な教育プログラムについて、その成果を全校生徒で共有して議論することで、自ら体験していない学習内容についても理解をする。また、本事業の全体像を生徒一人ひとりが把握して、より良い学習環境づくりについて考えたり意見したりする機会とし、今後の事業改善に役立てる。

2 日時・場所

令和5年10月18日（水）～11月3日（金）

ポスター発表月間 生徒玄関

令和5年10月23日（月）、25日（水）、27日（金） 昼休み

ポスター発表月間ポスターセッション 生徒玄関～教室棟1階廊下

令和6年1月12日（金） 4～6限

マイスター・ハイスクール事業 成果発表会 糸魚川市民会館

3 対象学年・コース・人数

全校生徒

4 実施内容および成果

（1）ポスター発表月間 令和5年10月18日（水）～11月3日（金）

1学期から始まった各教育プログラムの途中経過をA0版の用紙にまとめ、生徒玄関に全て掲示した。生徒が授業時間外で何時でもポスターを読むことができる半月間とした。

（2）ポスター発表月間ポスターセッション 令和5年10月23日（月）、25日（水）、27日（金）

各教育プログラムに取り組んでいる生徒のポスター発表を聞き、誰でも質疑応答ができる機会とした。23日（月）は1年生が、25日（水）は2年生が、27日（金）は3年生が聴く側となってポスターセッションを実施した。

昨年に引き続いて実施したことで、発表する上級生は緊張することなく研究成果をわかりやすく伝えていた。下級生も興味ある分野の発表を熱心に聞いていて、進級後に研究活動に関われる期待感を持っているようであった。事後の生徒アンケートからは「分かりやすかった」「よく理解できた」等の回答が多く得られ、本事業の取組の共有が図られたことが確認できた。



13 テーマのポスターセッションが昼休みに生徒玄関から3学年廊下で行われた

(3) マイスター・ハイスクール成果発表会 令和6年1月12日(金) 4～6限

本事業期間の最終3年目の成果を、事業関係者や市内中学生2年生、一般市民とともに共有した。来賓として、地元選出の国会議員や県議会議員、市議会議員、文部科学省初等中等教育局参事官付産業教育振興室 教科調査官、同窓会長・副会長、PTA会長が出席し、本校生徒202名含む651名の参加者で実施した。

<発表会時程>

◆ 開会式

13時15分～13時30分 開会式(15分間)

◆ 第1部

13時35分～13時40分 事業概要説明(5分間)

13時40分～14時30分 教育プログラム発表(50分間/各10分間)

- 1) 学校設定科目「地域探究」
- 2) 水産資源科 食品科学コース
- 3) 水産資源科 資源育成コース
- 4) 海洋開発科 海洋技術コース
- 5) 海洋開発科 海洋創造コース

◆ 第2部

14時40分～15時45分 パネルディスカッション(1時間05分)

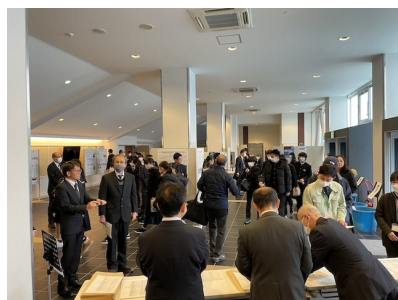
「産学官連携による実践的な学びで身についたこと」

ファシリテーター：山本 一輝 氏(事業伴走支援者)

生徒5名、マイスター・ハイスクール事業推進委員 清水 靖博 氏、小田嶋 大 氏、マイスター・ハイスクールCEO

◆ 閉会式

15時55分～16時10分



エントランスホールでの受付



教育プログラムの発表



パネルディスカッション

事前の発表練習はもちろん、昨年度の「マイスター・ハイスクール中間成果発表会」における発表経験や10月のポスター発表月間における発表経験があったりしたことで、発表者の多くは自信を持って取組内容を発表できていた。来場者からも「堂々と発表していて素晴らしかった」「海洋高校として取り組む必然性のあるテーマばかりで、地域にとってなくてはならない学校だ」といった高い評価を聞くことができた。

パネルディスカッションでは、それぞれのパネリストが産学官連携で取り組む実践的な学習によって自身の成長を実感できたこと、1年生からは進級後の専門的な学習に対する期待感が述べられた。本事業で生徒の資質・能力を客観評価するために使用したアセスメントテスト「学びみらいP

ＡＳＳ」によって見えてきた本校生徒のコンピテンシー向上の傾向については、生徒自身の成長実感の言葉によって裏付けることができたと考える。

この発表会に参加していた市内中学２年生全員の本校教育活動に対する興味・関心が高まり、再来年度の入学生として産学官連携による実践的な学習に参画することを期待したい。

VI 資格取得推進について

資格取得推進係 岡部 泰基

1 実施目的

資格取得に関する目標設定や状況把握を行い、教員がこれらの結果を分析して指導内容や方法を検討することによって資格取得の推進を図る。

2 実施内容

昨年度、各学科・コースで取得に向けた指導を行う資格の目標取得率を定め、今年度はその目標に到達するように指導してきた。また、資格取得推進の効果を捉える指標として、全国水産高等学校校長協会の「マリンマイスター顕彰制度」（制度の詳細は「成果報告書（１年次）」参照）で定められたポイントの合計点数によって表彰される生徒数を把握した。以下に３つの表彰段階を示す。

「マリンマイスターシルバー」（30 点以上 45 点未満）

「マリンマイスターゴールド」（45 点以上 60 点未満）

「マリンマイスタープラチナ」（60 点以上）

3 結果

１～３学年の各学科・コースの取得結果、マリンマイスター表彰結果を以下に示す。

（１）１学年

Google Forms を使用し漁業技術検定解説書（新課程）「第２部 筆記試験例題集」の電子化を行った。生徒には冊子と電子化した教材を提供することで、従来の紙ベースと電子データのどちらを使っても学習が出来る機会をつくった。また、昨年度受検し不合格となった生徒に対し受検する機会を設けたことで、学科試験の合格率は昨年度に比べると 10 ポイント、また、総合では 6 ポイント上昇した。合格率は昨年度に比べると微増したが目標合格率には達していないため、効果的な補助教材の研究を進める必要がある。

	ポイント	資格名	過去3年の合格率	取得目標	人数(人)	受検者数	取得者数	取得率	R6目標(%)
1年生 (66人)	5	水産海洋技術検定	78%	90%	72	65	40	62%	90%
	10	高等学校海洋情報技術検定	令和4年度開始	85%	68	65	33	51%	70%
	15	漁業技術検定	71%	70%	56	66	41	62%	70%

（２）水産資源科・資源育成コース

昨年度に引き続き、指導法や受検までのスケジュール管理が確立されている栽培技術検定２級では高い取得率となった。丙種危険物取扱者は、繰り返しの問題集学習が徹底できず目標取得率を下回ってしまった。３年次に取得する資格は、乙種危険物取扱者４類と潜水士であり、いずれも目標取得率に至らなかった。これは、大学進学を目指す生徒が受検しなかったことによって取得率が伸びなかったと考えられる。また、２年生については、英検や漢検などの検定に積極的に受検して合格していることから、次年度の結果が期待される。

	ポイント	資格名	過去3年の合格率	取得目標	人数(人)	受検者数	取得者数	取得率	R6目標(%)
2年生(19人)	2	丙種危険物取扱者	76%	90%	19	19	11	58%	90%
	10	栽培技術検定2級	95%	95%	20	20	19	95%	95%
	5	2級小型船舶操縦士	令和4年度開始	90%	19	0	0	0%	90%
3年生(15人)	5	乙種危険物取扱者4類	14%	30%	2	2	0	0%	30%
	5	2級小型船舶操縦士	79%	80%	6	6	6	100%	80%
	10	潜水士	75%	80%	10	0	0	0%	80%
合計	67								

(3) 水産資源科・食品科学コース

昨年と同じく2年生での食品技能検定は高い合格率であったが、3年生での合格率が下がってしまっていた。引き続き、資格の取得の学習意欲を高めること、学習時間を確保することを課題としていく。

	ポイント	資格名	過去3年の合格率	取得目標	人数(人)	受検者数	取得者数	取得率	R6目標(%)
2年生(21人)	10	食品技能検定1類	57%	70%	15	21	15	71%	70%
	10	食品技能検定2類	45%	80%	17	21	13	62%	80%
	5	HACCP技能検定	61%	80%	17	21	19	90%	80%
	2	食物調理技術検定3級	73%	100%	21	21	21	100%	100%
3年生(16人)	10	食品技能検定3類	34%	80%	13	16	9	56%	80%
	1	食品衛生責任者	100%	100%	16	0	0	100%	100%
	5	2級小型船舶操縦士	90%	90%	14	1	1	100%	90%
合計	73								

(4) 海洋開発科・海洋技術コース

乙種第4類危険物取扱者は、2、3年生ともに目標取得率を達成できなかった。今後、さらに上位のマリンマイスターに認定されるよう取り組んでいきたい。

	ポイント	資格名	過去3年の合格率	取得目標	人数(人)	受検者数	取得者数	取得率	R6目標(%)
2年生(18人)	15	漁業技術検定	令和5年度開始	100%	20	8	4	50%	80%
	5	乙種危険物取扱者4類	60%	60%	12	15	1	7%	60%
3年生(16人)	2	第二級海上特殊無線技士	70%	75%	12	34	26	76%	70%
	5	五級海技士 航海 (15点、四級があるとは検定されない)	98%	100%	16	16	15	94%	100%
	10	四級海技士 航海	30%	100%	5	2	0	0%	50%
	10	1級小型船舶操縦士	100%	100%	16	16	16	100%	100%
	10	潜水士	60%	63%	12	5	3	60%	60%
	5	乙種危険物取扱者4類	40%	63%	12	0	0	0%	0%
合計	92								

(5) 海洋開発科・海洋創造コース

2級小型船舶操縦士および潜水士の取得率向上を達成することができた。いずれも科目「小型船舶」や「課題研究」で資格取得の意欲を高めるような声掛けや、資格試験を意識した問題演習の時間を確保した効果と考える。

	ポイント	資格名	過去3年の合格率	取得目標	人数(人)	受検者数	取得者数	取得率	R6目標(%)
2年生(16人)	10	潜水技術検定 2級	100%	100%	16	15	15	100%	100%
	2	アーク溶接業務特別教育修了	100%	100%	16	16	16	100%	100%
3年生(15人)	10	潜水技術検定 2級	100%	100%	15	14	14	100%	100%
	2	ガス溶接技能講習修了	100%	100%	15	15	15	100%	100%
	10	潜水士	58%	60%	9	5	3	60%	70%
	5	2級小型船舶操縦士	88%	100%	15	7	7	100%	100%
	2	港湾潜水技士3級(学科)	令和4年度開始	100%	15	1	1	100%	100%
	2	小型車両系建設機械(整地・運搬・積み込み用及び掘削用)の運転特別教育修了	100%	100%	15	15	15	100%	100%
合計	73								

(6) マリンマイスター顕彰者

過去4年間の「マリンマイスター顕彰制度」で表彰された人数を以下に示す。今年度は「マリンマイスターシルバー」に8人表彰され、「マリンマイスターゴールド」に3人表彰された。過去3年の水準と比べて増加した。

(人)

	R1年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度
プラチナ	1	0	0	0	0
ゴールド	3	0	0	0	3
シルバー	10	9	3	4	8
合計	14	9	3	4	11

3 次年度の目標および検討事項

(1) 1 学年

3つの資格の受検日程の分散および限られた授業時間内での効率的な指導の検討が必要である。また、マリンマイスター顕彰制度の基礎資格として「水産海洋技術検定」があり、本年度不合格であった生徒への再受検の機会をつくる必要があると考えられる。検討事項は検定合格のための学習とするのではなく、新学習指導要領の趣旨に沿った授業展開の充実が挙げられる。

(2) 水産資源科・資源育成コース

大学進学を希望する生徒が多いコースであることから、推薦入試への準備期間と重ならない受検日程の検討が必要である。同時に、実用英語技能検定や日本漢字能力検定といった基礎学力をつける資格取得についても引き続き指導していきたい。また、科目「総合実習」や科目「課題研究」などの内容が本事業によって拡充されたことにより、資格取得に関わる時間に費やすことが難しくなっていることも課題である。

(3) 水産資源科・食品科学コース

進路活動が始まる3年生の資格取得への意欲を高める学習時間や指導の機会を増やしていく。2年生は、現状の合格率、意欲を維持向上させ3年生になっても引き続き資格取得に意欲的に取り組めるようにしたい。

(4) 海洋開発科・海洋技術コース

漁業技術検定は、これまで本コースの授業時間内で指導していて、来年度本コースに進級する2年生に不合格者が半数いるので、習熟度別の授業展開が必要となる。本コースから多くのマリンマイスター顕彰者が出た。引き続き船舶に関わる資格取得を推進していく。

(5) 海洋開発科・海洋創造コース

潜水土の取得率の向上および取得者数の増加を目指し、指導の改善を図る。

(6) 全体をととして

「マリンマイスター顕彰制度」表彰者数を資格取得状況の指標にする試みをしている2年目において、旧教育課程ではあるものの「マリンマイスターシルバー」に8人、「マリンマイスターゴールド」に3人表彰されるなど、過去3年と比較して資格取得推進が図られた。新教育課程が全学年において実施される来年度以降、この効果は更に顕著に表れると考えられる。今までの資格取得はコースごとの取組のため、1年生の時点ではその重要性が生徒に意識されにくかったが、今後は在学3年間を見通した目標設定ができ、生徒の意欲向上にもつながるものと考えられる。しかし、その一環として計画した1年生の資格取得においては、複数の資格の学習がしきれないという問題があり、全く資格を取得できない生徒もいた。一方で、生徒によっては1年生で既に3つの全ての資

格を有する生徒もいて、2年後の表彰者数として結果が出てくることを期待したい。今後はいかに取得率をあげていくか、生徒の学習時間の確保や効率的な学習計画の検討が必要である。

2、3年生については、各コースで既に取得に向けた指導方法を確立している検定が多いので、取得率については安定して高いといえる。しかし、マイスター・ハイスクール事業に関わる教育プログラムに取り組みながら資格取得にも力を入れることで、生徒にとっては多忙感が大きくなり、資格取得への意欲を失ってしまう場面もあった。3年生では、就職および進学準備時期と重なる検定で力を発揮しきれない生徒もいた。今後は、年間を通しての検定取得計画を立てたり、各検定の担当だけでなくクラス担任や共通科目の教員とも進捗状況などの情報共有をして、生徒自身が明確な目標を持って意欲的に資格取得に臨めるよう、連携した取組が必要である。

VII 広報活動について

広報係 増田 真之介

1 実施目的

マイスター・ハイスクール事業をはじめとする本校の魅力ある取り組みについて、公式ホームページ（http://www.kaiyou-h.nein.ed.jp/index_top.html）やスペシャルサイト「航海日誌」（<http://koukai-nisshi.com/index.php>）、SNS（Facebook、Instagram）、学校新聞「What's up 海洋」などの広報媒体によって広く発信する。さらに必要に応じてプレスリリースし、新聞やテレビ等の取材を促して、より多くの人々の目に触れる機会を創出する。また中学生向け体験入学イベント等を実施して、地元を中心に県内外から学ぶ意欲が旺盛な生徒の入学を増やす。

2 実施内容

（1）マイスター・ハイスクール事業の系統的発信

① 公式ホームページ（http://www.kaiyou-h.nein.ed.jp/index_top.html）

マイスター・ハイスクール事業の全体概要や本校での取り組み概要、事業報告書などを公開するため、公式ホームページで「マイスター・ハイスクール事業」の資料を掲載した。

② スペシャルサイト「航海日誌」（<http://koukai-nisshi.com/index.php>）

「航海日誌」は海洋高校のリアルな情報を発信するためのスペシャルサイトである。日常の様子を発信する「海洋 LIFE」では、授業や行事等に加え、マイスター・ハイスクール事業の講演や実習等の様子を生徒の目線で発信した。動画コンテンツを紹介する「海洋 TUBE」では、生徒がマイスター・ハイスクール事業の一環として、授業内で編集した実習動画や告知動画等を配信した。今年度のマイスター・ハイスクール事業に関連する記事は計 33 件であった。

<掲載記事一覧>

更新月日	タイトル	コンテンツ
令和5年5月11日	大学院生からの講義とアクセサリー作り！	海洋 LIFE
令和5年5月11日	あなたは何をしてみる？ ～海洋高校でつかめ！未来の世界～	海洋 TUBE
令和5年6月9日	世界初！？チョウザメアクセサリー誕生秘話	海洋 LIFE
令和5年6月13日	山は海の友達！森林保全活動 in 「海洋高校の森」	海洋 LIFE
令和5年6月23日	漁業体験	海洋 LIFE

令和5年6月26日	チョウザメ「フィッシュ&チップス」と「フィッシュバーガー」、いよいよ7月8日からスタート！	海洋 LIFE
令和5年6月27日	7月マリンスポーツフェスティバル in 能生（シーカヤック体験乗船会）参加者募集中	海洋 LIFE
令和5年7月5日	第3回マイスター・ハイスクール進路講話「海藻で海も人もすこやかに」	海洋 LIFE
令和5年7月8日	チョウザメイベントを開催しました！！	海洋 LIFE
令和5年7月9日	お魚が作った野菜「アクアポニックス」～レタスの販売をしました！～	海洋 LIFE
令和5年7月19日	マリンスポーツで能生の魅力を発見！	海洋 LIFE
令和5年7月21日	マリンスポーツイベントを考えよう！	海洋 LIFE
令和5年7月22日	世界に1つだけ！チョウザメアクセサリーのワークショップを行いました！	海洋 LIFE
令和5年8月24日	第26回全国水産・海洋高等学校ダイビング技能コンテスト	海洋 LIFE
令和5年9月8日	漁師のD2C ～実習船漁獲するめいか販売に向けて～	海洋 LIFE
令和5年9月16日	ニューヨーク魚醤販路開拓作戦 Vol.1	海洋 LIFE
令和5年9月18日	ニューヨーク魚醤販路開拓作戦 Vol.2	海洋 LIFE
令和5年9月19日	うみがたりとアクアポニックスの共同実施！～うみがたりガーデン2023～①	海洋 LIFE
令和5年9月22日	うみがたりとアクアポニックスの共同実施！～うみがたりガーデン2023～②	海洋 LIFE
令和5年9月26日	インターンシップに行ってきました！	海洋 LIFE
令和5年9月27日	アカムツの採卵実習	海洋 LIFE
令和5年10月2日	漁師のD2C ～ハイブリットで実習船漁獲のマグロとカジキ販売します！～	海洋 LIFE
令和5年10月3日	うみがたりとアクアポニックスの共同実施！～うみがたりガーデン2023～③	海洋 LIFE
令和5年10月29日	第33回全国産業教育フェア福井大会	海洋 LIFE
令和5年10月31日	まぐろ・かじき大集合だソイ！おまんた食ベナイ！	海洋 TUBE
令和5年11月5日	上越市立水族館うみがたりのレストラン～レストランテロス クエントス デル マール～	海洋生のイチオシ
令和5年11月26日	うみがたりとアクアポニックスの共同実施！～うみがたりガーデン2023～④	海洋 LIFE
令和5年12月8日	令和5年 海洋開発科海洋技術コース2年「乗船実習紹介動画～航海当直編～」	海洋 TUBE
令和5年12月12日	令和5年 海洋開発科海洋技術コース2年「乗船実習紹介動画～イカ釣り編～」	海洋 TUBE
令和5年12月14日	令和5年 海洋開発科海洋技術コース2年「乗船実習紹介動画～船内生活編～」	海洋 TUBE
令和5年12月19日	令和5年 海洋開発科海洋技術コース2年「乗船実習紹介動画～寄港地見学編～」	海洋 TUBE
令和6年1月12日	成果発表会を開催しました！！	海洋 LIFE

令和6年2月7日	第4回糸魚川地域クラウド交流会 in 新潟県立海洋高等学校を開催します！！	海洋 LIFE
----------	---------------------------------------	---------

③ SNS (Facebook、Instagram)

Facebook・Instagramでの情報発信を行い、「公式ホームページ」や「航海日誌」等への導線を確保した。Instagramは令和5年4月から、現在（令和6年2月）までの間に70回投稿し、フォロワーは約580名となった。また、実際に生徒がこれらのSNSを使って販売商品等の紹介をする投稿をし、ECサイト（電子商取引サイト）への集客を図った。



Facebook



Instagram



まぐろ・かじきの販売を紹介する投稿



事業成果発表会を紹介する投稿

④ 学校新聞「What's up 海洋」および「マイスター・ハイスクール通信」

インターネット上だけでなく、“紙媒体”でも情報を発信することで、より多くの地域住民の「本校への理解」が深まるものと推察されることから、本校の魅力やマイスター・ハイスクール事業に関する取組を伝えるため、昨年度に引き続き学校新聞「What's up 海洋」に「マイスター・ハイスクール通信」の欄を設けて学期ごとに1回（計2回）作成した。これを上越地区（糸魚川市、上越市、妙高市）の全中学校に配布するとともに、糸魚川市能生地区の回覧板に掲載した。

(2) プレスリリースによる新聞・テレビ等への掲載

本事業に関する実習やイベント等を実施する際に、県内新聞社記者クラブ等にプレスリリースし、マスメディアを通じた情報発信機会を増やした。今年度の本事業に関連した新聞記事掲載は12回、テレビ放送（ニュース等）が1回、Web上の記事が6回であった。掲載・放映日や内容、メディアは以下のとおりである。

<掲載（放送）された取組一覧>

掲載・放送日	内容	メディア	掲載会社
令和5年5月28日	出張学校説明会	新聞	埼玉新聞
令和5年6月17日	あんこう吊るし切り	Web	にいがた経済新聞
令和5年6月18日	ご当地グルメアレンジ	新聞	糸魚川タイムス
令和5年7月9日	チョウザメバーガー販売	新聞	糸魚川タイムス
令和5年8月8日	職場見学	新聞	新潟日報
令和5年9月14日	ニューヨーク展示会出展	新聞	新潟日報
令和5年9月29日	ニューヨーク展示会出展	新聞	糸魚川タイムス
令和5年10月12日	ニューヨーク展示会出展	Web	にいがた経済新聞
令和5年10月16日	糸魚川市水産資源活用産学官連携事業	新聞	糸魚川タイムス
令和5年11月13日	第4回マイスター・ハイスクール 進路講話	Web	にいがた経済新聞
令和5年12月4日	寒ぶりまつり	Web	上越妙高タウン情報
令和5年12月10日	寒ぶりまつり	ニュース	NHK
令和5年12月10日	寒ぶりまつり	Web	NHK
令和5年12月24日	発眼卵放流	新聞	糸魚川タイムス
令和6年1月15日	成果発表会	新聞	糸魚川タイムス
令和6年1月19日	「ごっつあんラーメン」「韓国風ごっつあん海苔」新発売	Web	上越妙高タウン情報
令和6年1月24日	「ごっつあんラーメン」「韓国風ごっつあん海苔」新発売	新聞	糸魚川タイムス
令和6年2月3日	「ごっつあんラーメン」「韓国風ごっつあん海苔」新発売	新聞	新潟日報
令和6年2月6日	発眼卵放流	新聞	朝日新聞



あんこう吊るし切りイベント（にいがた経済新聞）



ニューヨーク展示（糸魚川タイムス）会出展



発眼卵放流（糸魚川タイムス）



成果報告会（糸魚川タイムス）

（３）マイスター・ハイスクール事業のPR動画配信

前年度、本校における本事業における取組の発信を行うため生徒（１年生７名）と動画制作会社が共同でPR動画の制作を行った。今年度は完成したPR動画を本校のYouTubeチャンネルで公開をした。公開日の５月１１日（木）から２月末現在までの再生回数は１,６００回であった。また総再生回数の内、約８２％がチャンネル登録外の視聴者であった。



制作打合せ中の生徒



完成したPR動画

（４）上越地区対象の出前授業の実施

本校の取組や実習内容を地元の小中学生に伝えるために、新潟県上越地域（糸魚川市・上越市・妙高市）の小中学生を対象とした出前授業プログラムを全小中学校に案内をした。今年度は糸魚川市内小学校１校、上越市内中学校１校、上越市内小学校４校で教員または生徒が授業を行った。

３ 効果および課題

本校のインターネット広報媒体における今年度の投稿回数は、航海日誌 56 回（令和４年度 77 回）、YouTube 9 回（令和４年度 14 回）、SNS 70 回（令和４年度 100 回）であり、YouTube の登録者は約 100 人増、SNS のフォロワーは約 200 人増となった（令和 6 年 2 月末現在）。このことから、多くの人にマイスター・ハイスクール事業の活動や本校の取り組みについて知ってもらうことができたと考える。

マイスター・ハイスクール事業PR動画は、YouTube チャンネルでの公開以外にも出張学校説明会等の広報イベントでも再生しており、映像を見た中学生からは「海洋高校の取り組みについてもっと知りたい」や「私も動画制作をしてみたい」といった好意的な声が聞かれた。

出前授業は本校の取り組みを知ってもらうだけでなく、生徒と触れ合う機会ともなり、海洋高校への親しみを持ってもらう機会となった。一方で小中学校への告知が5月中旬であったため、小中学校の授業計画に組み込みづらかったことや、告知が1回のみだったため、2学期以降の申し込みがなかったことが課題として挙げられる。

体験入学の参加者が遠隔地 88 名参加、上越地域 37 名参加（令和4年度は遠隔地 71 名参加、上越地域 45 名参加）と遠隔地の中学生の参加人数は前年度に引き続き増加傾向にある。本校のインターネット媒体による情報の発信は、インターネットの特性を生かして魚や海といった水産・海洋の分野に興味を持つ中学生に対する情報発信が結果を発揮していると考えられる。ただし、上越地区の中学生の参加者人数は昨年度に比べて減少している。この要因としては授業料無償化による私立高校等選択肢の増加や「水産・海洋系の学習しかないのではないか」「進路先が水産・海洋系の分野に固定されてしまうのではないか」といった本校の実態に対する認知不足から来る不安等から、本校を進学先の候補から外してしまうことに起因していると考えられる。

上越地域の小中学生が本校を知る機会を継続的につくり、本校の魅力的な取り組みに触れてもらうことで上越地域からの志願者増加も目指したい。

4 今後の展開

本校への志願者増加を目指すには、体験入学イベント等の広報イベントに参加してもらい、本校の取り組みについて知ってもらうことが重要である。そのため、地元の小・中学生に本校の実態を把握してもらうべく体験入学イベントの開催、学校新聞「What's up 海洋」を地元の全中学校・全クラス分に配布を引き続き行う他、出前授業の年度開始前の告知を徹底する。また、本校のインターネット広告媒体の発信に関しては、各コースと連携を密にして内容の充実度と更新速度を上げることを目指す。さらに、地元の小・中学生に海洋高校の魅力を知ってもらう機会を増やすことで、令和6年度の志願者数が定員を満たすように広報活動を実施する。

VIII 探究学習教員研修会について

マイスター・ハイスクールCEO 松本 将史

1 実施目的

今年度から、新学習指導要領に基づく教育課程変更により、課題解決型の探究学習に取り組む科目「課題研究」が全ての学科・コースで2単位増加となった。本校教員には、その専門性を背景にして合理的に課題解決に導く視点を持ちながら、生徒との対話をとおして生徒が能動的に学習活動に取り組むことを支援していくことが求められている。そのために、教員同士がその資質・能力の向上に向けて学び合い、より良質な教育を創っていかうとする学校文化の醸成をする。

2 実施内容

(1) 第1回「対話力の向上」 令和5年5月22日（月）4・5限

本事業の伴走支援事業者である Idea partners 代表の山本 一輝 氏を講師に招き、探究学習の概念を学んだ。実体験が伴わない知識だけの学びは、実社会での応用が限られるため、経験と教科・専門教育を繋ぎ、資質・能力を高めるための橋渡しになる探究学習が必要になる。

生徒の探究学習の支援は、教員自身も学び続けることが必要になるため、教員間の対話を密にして、それぞれの教員が持っている経験や勘に基づく「暗黙知」を、教員同士が共有して誰でも活用できる「形式知」として蓄積していく必要があることを理解した。



山本氏の講義



グループで対話する

(2) 第2回「ナレッジマネジメント」 令和5年7月3日(月) 4・5限

引き続き Idea partners 代表の山本 一輝 氏を講師に招き、個々の教員の成功や失敗の体験に基づく「暗黙知」を共有して学校としての形式知を蓄積していくナレッジマネジメント(知的資産の共有)の手法を学んだ。しかし、研修会以外の時間での Google Forms によるナレッジ入力を教職員に促さなかったことから、ナレッジマネジメントの手法の理解で留まってしまった。



一対一の対話から



グループで対話を重ねる

(3) 第3回「成果を生む組織づくり」 令和5年10月5日(木) 4・5限

本事業も終盤に入ったことから、マイスター・ハイスクールCEOより、これまでの成果や課題、次年度以降も継続すべきことや中止すべきこと等をグループで話し合った。日頃あまり話題にしないことでも、場が与えられることにより多くの教職員が対話をして今後の展開について意見を出した。また、研修会中盤では、Idea partners 代表の山本 一輝 氏から、組織形成のステージモデルについて講義してもらい、対話を重ねた先にある組織をイメージすることができた。



本事業の今後の展開について意見を出し合う



組織形成モデル「タックマンモデル」の紹介

(4) 第4回「本校の探究学習の事例研究」 令和5年12月4日(月) 4・5限

水産資源科・資源育成コースの増田 真之介 教諭と岡部 泰基 教諭、マイスター・ハイスクールCEOの3名が自分の探究学習支援例を紹介して、成果につながった「行動」、「行動」の背景に

ある「考え方」、「考え方」の更に背景にある「価値観」を参加者がそれぞれ捉え、自身の探究学習支援に活かせるような教訓をグループで発表し合った。

成果を出すまでに必要な要件	
① テーマ設定 海洋高校及び食品科学コースの課題としての必然性 先行研究が多い(1990年代)が研究成果の応用事例が少ない	
② 指導力 食品製造・食品化学・食品衛生に関する体系的な理解 食品分析技術	
③ コンピテンシー 外部との関係構築に必要な対人能力をベースに、対自己・対課題力も	
④ 外部連携 生産者や試験機関、行政及び商工関係者等との連携が 欠かせない	

⑤ 活動資金 試験販売から生じる利益を活用	
⑥ 必要な時間 外部連携、食品分析プロトコル作成、製造からマーケ・販売に至る様々な業務(勤務時間内には終わらない)	
⑦ 生徒の意欲喚起 結果(分析・開発・製造・販売)が見えるまで、教員の能力にほとんど依存していても良いのでやり抜く。	
⑧ 社会実現に向けた動き 販売量が一定以上でなければ課題解決にはならないので、事業拡大を目指して、製造からマーケ、販売までを部活化した。	

生徒の資質・能力向上はもちろん、生徒募集強化と水産資源の有効利用も目的として取り組んだ。

成果につなげたと思われる活動	自身の実践に活かせるようなポイントや教訓
行動に変えることになったであろう態度	
部活の活動にありそう(例: 試験販売、食品分析、学内販売等)	

マイスター・ハイスクールCEOの事例発表の一部

事例研究ワークシート

(5) 第5回「ICT活用とDXへの可能性」 令和6年2月14日(水) 4・5限

KDDI株式会社 DX推進本部 地域共創室 加藤 英夫 氏を講師に招き、水産業の現場で実用または試験されているICT活用やDXについての事例を多く紹介してもらった。産業界がDXに向けて様々な取組を進めていることを知り、高校教育の段階でもその一端に触れさせる学習内容の導入の必要性を感じることができた。また、特別な機器や経費をかけなくても、現在本校にあるICT機器で十分に学習活動を効率化することができる視点ももらうことができた。

講義の後には、栽培漁業実習棟や潜水プール実習棟、食品科学工場等の現場を見てもらい、実習現場で導入できそうなICT活用についてもアドバイスをもらった。



講義を熱心に聞く教職員



実習現場におけるICT導入についてアドバイスもらう

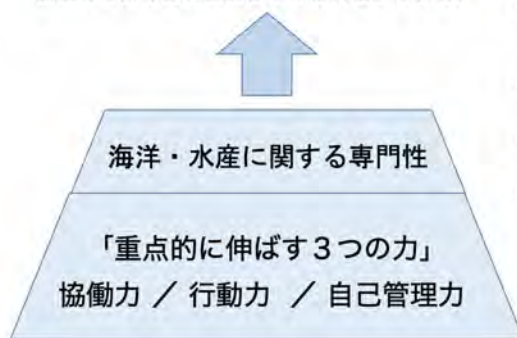
IX 事業効果検証について

カリキュラムマネジメント係 岩谷 和彦

1 はじめに

本事業では、令和4年3月にカリキュラムマネジメント係を中心に定めた本校生徒として「重点的に伸ばす3つの力」を土台にした上で、地域理解と水産・海洋の専門性や獲得した「活力ある地域産業を担う海洋・水産プロフェッショナル」を目指してきた。カリキュラム刷新による本校生徒の資質・能力向上への効果を検証するために、リテラシー(知識を活用して課題を解決する力)とコンピテンシー(経験を積むことで身についた行動特性)を客観的に数値評価できるアセスメントテスト「学びみらいPASS」(河合塾)、「マイスター・ハイスクール自己評価アンケート」を実施した。

**活力ある地域産業を担う
海洋・水産プロフェッショナル**
(仕事を通じて自己実現を図りながら、他者と
協働してより良い社会をつくる行動ができる)



<成長の測定>

- マイスター・ハイスクール
自己評価アンケート
- 学びみらいPASS
- 資格取得率
- ルーブリックによる
自己評価と各教科・コースの
評価および学期末面談

マイスター・ハイスクールで目指す海洋高校生の成長

「重点的に伸ばす3つの力」については、学期ごとの各教科担当教員による評価と生徒の自己評価を行い、ルーブリックで示される上位の能力獲得に向け、クラス担任と生徒の面談を通じて動機付けをするサイクルでその伸長を支援した。この取組で得られる評価は、あくまで生徒個人の内省と動機付けに利用されるものであるため、本報告書での記載は省略する。



	A	B	C
協働力	協働する意味を理解し、リーダーシップのもと、自分と他者の意見や少数意見を活かしてより良い考え方を導き出し、協働して活動できる。	協働する意味を理解し、自分と他者の意見の共通性や相違点に気づき、整理するとともに協力して活動できる。	協働する意味を理解し、自分の意見を表現できる。
行動力	目的を理解して計画を立案・実施し、内容の評価して改善するための行動ができる。	目的を理解して、計画を立てて実施することができる。	目的を理解して、自分に課せられたことをやり遂げることができる。
自己管理能力	基本的な生活習慣を身に付けていて、自己実現に向けて自分を律することができる。	基本的な生活習慣を身に付けていて、自分の立場を理解し、感情や行動を制御できる。	基本的な生活習慣を身に付けていて、自分の感情や行動を制御できる。

「重点的に伸ばす3つの力」ルーブリックを活用した動機付けの流れ

専門性の獲得を把握するための指標としての資格取得率の変化については、VI に記載したので、ここでは「学びみらいPASS」および「マイスター・ハイスクール自己評価アンケート」の結果とその分析をする。

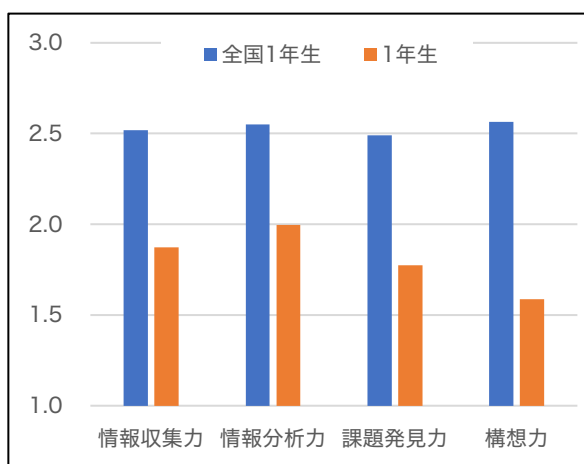
「学びみらいPASS」の受検は令和4年4月から開始していて、今年度は4月に全学年が受検し、3年生のみ卒業前の資質・能力の伸長を把握するために12月にも受検した。「マイスター・ハイスクール自己評価アンケート」は令和5年4月と令和6年1月に全学年が回答した。

2 結果

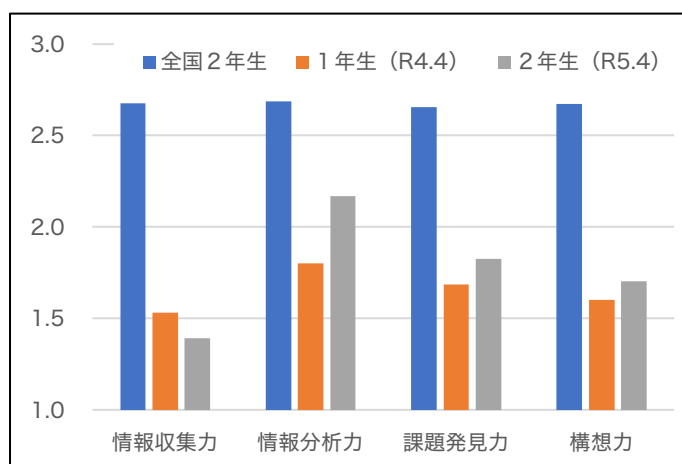
(1) 学びみらいPASS

測定されるリテラシーの4つの能力（情報収集力・情報分析力・課題発見力・構想力）とコンピテンシーの9つの能力（対人基礎力として親和力・協働力・統率力、対自己基礎力として感情抑制

力・自信創出力・行動持続力、対課題基礎力として課題発見力・計画立案力・実践力）の学年別の平均値を用い、本事業の全校生徒に対する効果を捉えた。なお、グラフ中の縦軸の最大値は5、全国平均は平成29年～令和3年度の結果に基づいている。



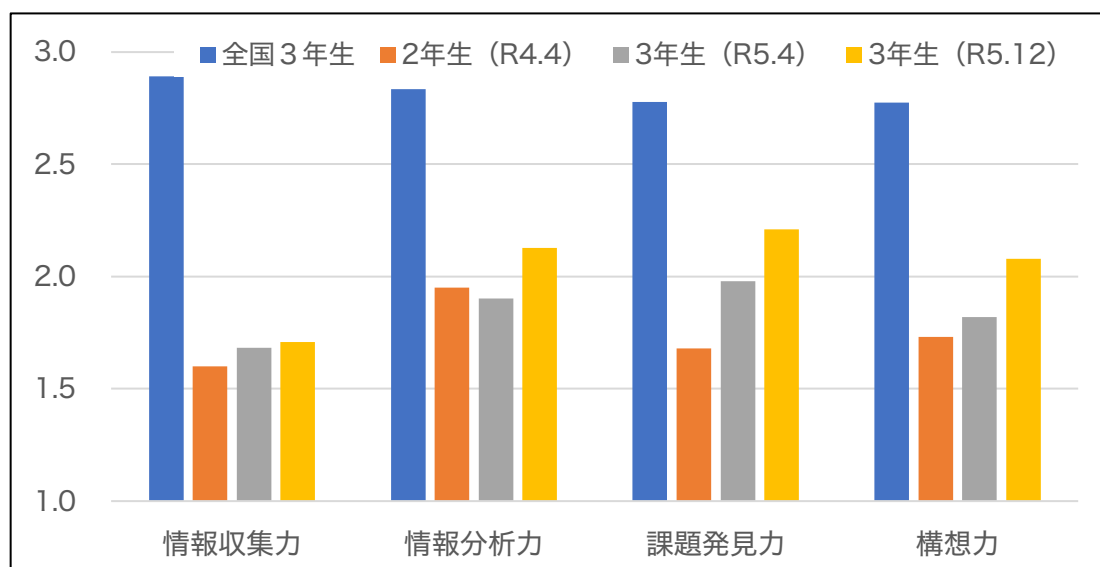
令和5年度1年生のリテラシーの結果



令和5年度2年生のリテラシーの変化

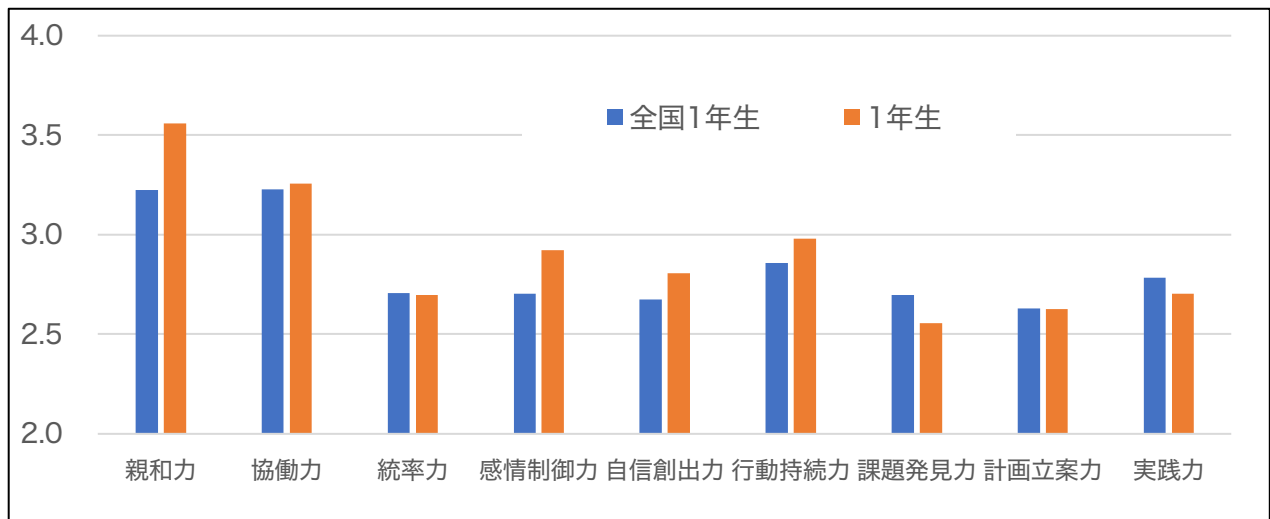
本年度の1・2年生のリテラシーは、昨年度に引き続き全国平均に比べて低いことが分かった。リテラシーは、教科学力との相関が見られる資質・能力であり、総じて教科学力が低い本校生徒の特徴を反映する結果となった。2年生のリテラシーは、情報収集力を除く3つの力で伸びていて、1年生の学習活動のなかで少しずつではあるがリテラシーを向上させたことが認められた。

続いて、3年生のリテラシーの結果を示す。1・2年生と同じく全国平均より低い傾向にはあるが、2年生の4月から3年生の12月にかけて4つの全ての力が伸びている。日々の共通教科学習と実習を含む専門教科学習、本事業で展開される教育プログラム等が複合的に作用した結果であると考えられる。

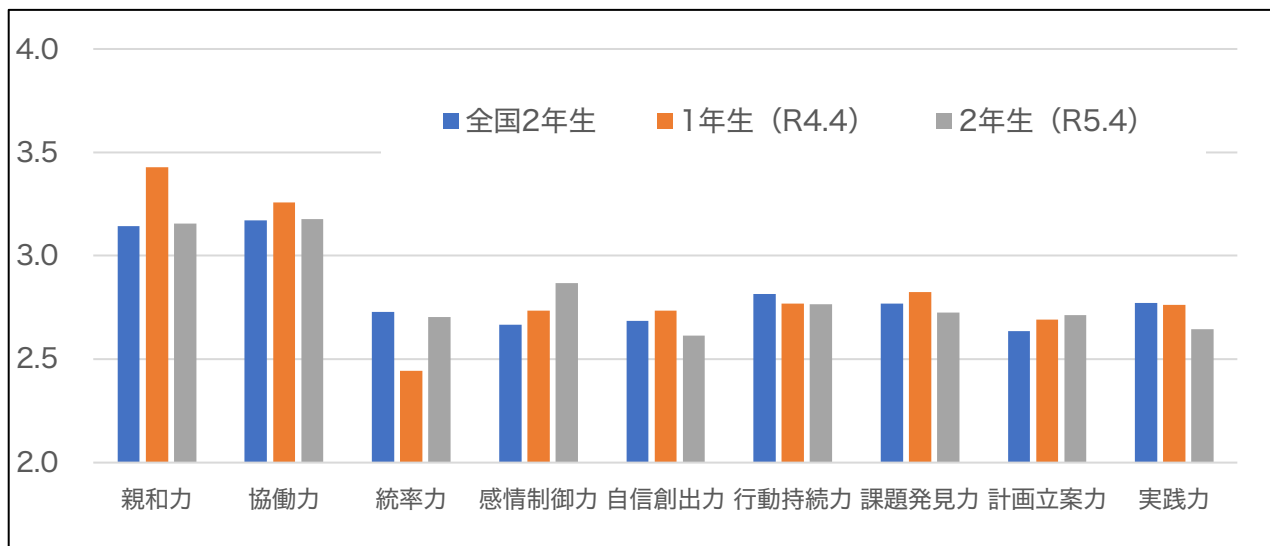


令和5年度3年生のリテラシーの変化

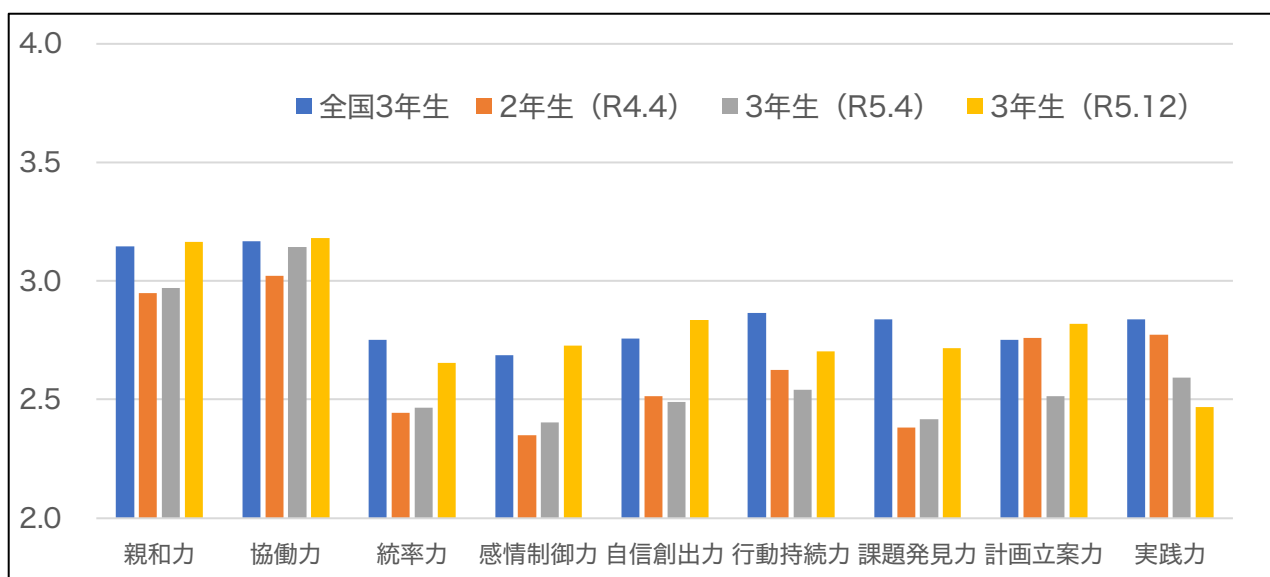
また、コンピテンシーは以下のグラフのとおりとなった。



令和5年度1年生のコンピテンシーの結果



令和5年度2年生のコンピテンシーの変化



令和5年度3年生のコンピテンシーの変化

コンピテンシーは教科学力との相関が見られない資質・能力であり、本校生徒では全国平均よりも高い力が多く見られた。

1年生は「親和力」「協働力」が高い傾向にある。これらの力は入学時の高校生活に対する期待感や新しい環境に早く馴染もうとする気持ちから、全国的にも1年生で高くなりやすい力であり、現2年生が1年生のときの結果にも表れている。また、3つの対自己基礎力が全国平均を上回っているため、自己を律しながら学習に取り組むことによる教科学力向上や専門的な知識・技術の着実な習得が図られることが期待される。

2年生は、統率力や感情抑制力が1年生のときと比較して伸びている。しかし、その他の力で顕著な伸びが確認できない。1年生には、グループ学習や校外での学習が多い学校設定科目「地域探究」や実習が多い科目「水産海洋基礎」等、特色ある科目がカリキュラムに配置されているが、受け身の学習スタイルが主であるため全般的にコンピテンシーの伸びが見られにくいと考えられる。

3年生は、3年生の4月から12月にかけて顕著に伸びている力が多く、「親和力」「協働力」「感情抑制力」「計画立案力」「自信創出力」で全国平均を超えている。また、全国平均を超えていなくても「統率力」「行動持続力」「課題発見力」も伸びていた。つまり、9つの力のうち8つの力を3年生の1年間で大きく伸ばしていることが分かった。このことは、前述の「重点的にのばす3つの力」として定めた「協働力」「行動力」「自己管理力」の育成が進んだことを基盤に、本事業で実施された課題解決型の教育プログラムを通じた学習体験や本校が従来から3年生で重点的に実施している職業現場を意識した実習が持つ教育機能が発揮されていると考えられる。唯一、「実践力」だけが調査期間中に低下していく傾向が見られた。この力は、課題解決に有効な計画を実行する力であり、計画の有効性の理解と実行の反復によって身に付くとされている。本校の教育プログラムにおいては、ともすると理論背景の理解や実行後の振り返りの時間確保が不足しているのではないかと推察される。今後、教員研修会等でこの課題を認識して改善していきたい。

以上のことから、本事業を含めた本校のカリキュラムの有効性は3年生の1年間で顕著に現れることが確認できた。この事実は、本事業の効果検証のみならず、本校の教育機能の説明するために非常に重要なことであり、専門高校の存在意義の一端を示しているものと考えられる。

なお、本項の分析は各学年の平均値を用いて本校生徒の一般像を掴もうとしたものである。「学びみらいPASS」の本来の活用法は、一人ひとりの生徒に対して非認知的能力の伸びを気づかせて更なる成長を促すことにある。引き続き、教科学力評価では捉えきれない生徒の資質・能力を「学びみらいPASS」で把握し、教員が適切な助言を生徒に与えいく仕組みを維持する必要があると考えられる。

(2) マイスター・ハイスクール自己評価アンケート

本事業の取組を、ICT活用、地域理解と6次産業化・観光誘客、アンテナショップの活用、の3つに分けて全校生徒が自己評価した。各質問項目に対し、当てはまる（評点5）、まあ当てはまる（評点4）、どちらでもない（評点3）、あまり当てはまらない（評点2）、当てはまらない（評点1）の5段階で回答を得た。表に示す各質問項目の上段から、令和4年4月実施時の評点の平均値、令和5年1月実施時の評点の平均値、令和5年12月の評点の平均値である。

ICT活用に関する自己評価結果

質問項目	R5入学生	R4入学生	R3入学生	R2入学生	平均
ICT(PC・タブレット・スマホ等をつかった情報処理と通信技術)の知識や技術の習得に積極的に取り組みたい		4.1	3.6	4.0	3.9
	4.1	4.0	3.8	3.7	3.9
	4.0	4.3	3.9		4.1
効率的に仕事をしたり新しい価値を生み出したりするためのICTの活用方法を知っている		3.0	2.6	2.9	2.8
	2.8	3.8	3.0	2.9	3.1
	3.0	3.2	3.3		3.2
普段からICTを活用して、学習や趣味に活用したり、友人や家族との連絡などを効率化したりしている		3.9	3.6	3.8	3.8
	4.0	3.5	3.0	3.1	3.4
	4.0	3.0	3.1		3.4
ICTを活用すれば、地方にいても収益性の高い（もうかる）仕事をつくれると思う		3.9	3.5	3.1	3.5
	3.9	3.6	3.2	3.1	3.5
	3.9	3.9	3.9		3.9
平均		3.7	2.5	3.5	3.2
	3.7	3.7	3.3	3.2	3.5
	3.7	3.6	3.6		3.6
令和4年4月から令和5年1月の伸び率(%)		0.0	24.2	-7.8	16.4
令和5年1月(R5入学生は4月)から令和5年12月の伸び率(%)	0.0	-2.8	8.3		5.6

ICT活用に関する自己評価は、本評価を開始した令和4年4月から全体的に高くなっていて、授業のなかでICTを活用する機会が増え、ICT活用への意欲が高まったり、その効果の理解が深まったりしたことが確認できた。令和3年度入学生の令和4年4月から令和5年1月にかけて伸び率が高いのは、ICTの活用機会が増える2年の専門教科の授業の開始と本事業の開始が重なったためと考えられる。

今後も、あらゆる場面でICT活用による業務効率化や付加価値の付与が理解できる機会を増やしていく必要がある。

地域理解と6次産業化・観光誘客に関する自己評価

質問項目	R5入学生	R4入学生	R3入学生	R2入学生	平均
糸魚川市の産業や観光、伝統文化、ジオパークとしての特徴等を知っている		3.1	2.7	2.9	2.9
	3.0	3.5	3.2	3.2	3.2
	3.3	3.7	3.1		3.4
他の地域と比較したときの糸魚川市の強みや弱みを自分なりに答えられる		3.2	2.7	3.2	3.0
	2.8	3.8	3.1	3.3	3.3
	3.2	3.7	3.2		3.4
糸魚川市の水産業や海洋関連産業の概要や特徴を知っている		3.0	2.8	3.0	2.9
	2.9	3.2	2.9	2.9	3.0
	3.1	3.7	3.0		3.3
6次産業の生産から販売までの具体的な仕事のイメージができる		3.1	3.0	3.5	3.2
	3.1	3.2	3.2	2.9	3.1
	3.0	3.7	3.3		3.3
6次産業化により収益性の高い仕事を作れると思う		3.6	3.2	3.5	3.4
	2.5	3.5	3.4	3.1	3.1
	3.4	3.8	3.3		3.5
糸魚川市に観光顧客を呼び込む方法について知っている		2.8	2.6	2.9	2.8
	2.8	4.0	3.8	3.5	3.5
	2.6	3.0	2.9		2.8
企画したイベントにおける参加者や観客の完全管理について考えられる		2.8	2.9	3.0	2.9
	3.7	3.3	3.1	3.1	3.3
	3.0	3.2	3.1		3.1
糸魚川のみならず、自分が今後住む土地の強みや弱みについて考え、地域活性化に関わりたいと思う		3.6	3.3	3.3	3.4
	4.1	3.4	3.2	3.1	3.5
	3.5	3.5	3.1		3.4
平均		3.2	2.9	3.2	3.1
	3.1	3.5	3.2	3.1	3.2
	3.1	3.5	3.1		3.2
令和4年4月から令和5年1月の伸び率(%)		8.6	9.4	-3.2	14.7
令和5年1月(R5入学生は4月)から令和5年12月の伸び率(%)	0.0	0.0	-3.1		-3.1

地域理解と6次産業化・観光誘客に関する自己評価も、本事業が本格的に開始された令和4年4月から全体的に高くなっていて、授業のなかで地域理解が図られるとともに、6次産業化や観光誘客の仕組みを理解する機会が多くつくられたことが読み取れた。

本結果のなかで特筆すべきは、令和4年度入学生の令和5年12月の全ての項目の評点が他の学年の同時期と比して最も高いことである。令和4年度入学生は、1年次に新設された学校設定科目「地域探究」で系統的かつ体験的に地域理解や6次産業化、観光誘客について学んだ最初の学年である。この生徒達が2年生で専門性の高い具体的な事象に触れるなかで、1年次の理解が分化・統合・深化されたと考えることができる。引き続き同じ質問形式による自己評価を継続し、カリキュラム刷新の効果を検証していきたい。

アンテナショップの活用に関する自己評価

質問項目	R5入学生	R4入学生	R3入学生	R2入学生	平均
人口減少の時代において、顧客に自社商品のファンになってもらう必要がある		3.9	3.5	3.8	3.7
	2.8	4.0	3.8	3.5	3.5
	3.9	3.9	3.6		3.8
商品購入から商品消費に至るまでの顧客体験（顧客満足度）を向上させるためのICT活用方法を知っている		3.0	2.7	2.9	2.9
	2.9	3.3	3.1	3.1	3.1
	2.8	3.0	3.1		3.0
店舗やイベント販売（オンライン販売含む）に集客する方法を知っている		3.0	2.7	3.1	2.9
	3.3	3.4	3.2	3.2	3.3
	3.0	3.4	3.2		3.2
商品やサービス開発から販売（オンライン販売含む）に至るまでの流れと利益が生まれるしくみを理解している		3.0	2.9	3.1	3.0
	3.4	3.5	3.2	3.2	3.3
	3.1	3.4	3.3		3.3
店舗やイベント販売で顧客と直接コミュニケーションすることが好きだ		3.3	3.0	3.3	3.2
	3.8	3.4	3.1	3.1	3.4
	3.4	3.3	3.2		3.3
アンテナショップ（オンライン販売やオンラインイベントを含む）で、学習成果を生かすような活動をしてみたい		3.6	3.2	3.3	3.4
	4.3	3.5	3.4	3.1	3.6
	4.1	3.9	3.7		3.9
平均		3.3	3.0	3.3	3.2
	3.4	3.5	3.3	3.2	3.4
	3.4	3.5	3.4		3.4
令和4年4月から令和5年1月の伸び率(%)		6.1	10.0	-3.0	13.0
令和5年1月(R5入学生は4月)から令和5年12月の伸び率(%)	0.0	0.0	3.0		3.0

令和4年4月にオープンした本校アンテナショップの活用に関する自己評価も、令和5年12月にかけて全体的に高くなっている。全ての生徒がアンテナショップでの実習を体験できたわけではなかったが、様々な教育プログラムのなかで、学校ホームページやSNSでのイベント告知、OMOに基づくマーケティング、イベント来客者への言葉掛けや安全対応、商品購入者へのアフターフォロー等、顧客体験の向上を目指した取組をしたことが自己評価の高まりに影響していると考えられる。

自己評価アンケート全体を通じて、学校設定科目「地域探究」を履修していない令和2年度入学生と令和3年度入学生のすべての質問項目・アンケート時期における評点の平均が3.19に対し、学校設定科目「地域探究」を履修している令和4年度入学生と令和5年度入学生のそれが3.46であることが確認できた。本事業が目指す人材像「糸魚川の魅力を理解し、ICT活用やDXに対応できる活力ある地域産業を担う海洋・水産プロフェッショナル」の基礎教育として新設した科目の学習が、当該年度だけでなく進級後にも好影響を与えていると考えられる。引き続き入学初年度に3年間の学習への動機付けを行い、2・3年生で行われる課題解決型の学習において、生徒の資質・能力を伸ばす適切な指導・支援を展開していく必要がある。

X 総括

マイスター・ハイスクールCEO 松本 将史

本事業により、水産・海洋関連産業や地域の課題解決に取り組む専門性を活かした実践的な教育プログラムが展開され、様々な商品やサービスが生まれて地域振興に寄与することができた。また、「マイスター・ハイスクール自己評価」の結果から、ICT活用や地域理解、6次産業化、観光誘客等の理解が図られ、本事業で目指す人材像「糸魚川の魅力を理解し、ICT活用やDXに対応できる活力ある地域産業を担う海洋・水産プロフェッショナル」の育成ができたと考ええる。

また、これらの教育課程で伸ばさせた資質・能力は、アセスメントテスト「学びみらいPASS」で捉えられ、3年間の教育課程をとおしたリテラシーの着実な向上とコンピテンシーの著しい向上が認められた。つまり、学んだ知識・技術を発揮して社会に役立てることのできる考え方や行動力の備わった人材育成を進められたと言える。さらに、学期に1回実施した「マイスター・ハイスクール進路講話」では、様々な業界で活躍する講師の講話を聴き、多くの生徒が自己の生き方・在り方を考察したことが認められたことから、キャリア形成に対する動機付けもできたと考えている。このことは、本事業の前後（令和2年度と令和5年度）の卒業生の水産・海洋関連産業への就職率が48%から62%に上昇したことと、水産・海洋関連分野への進学率が49%から64%に上昇したことからも確認することができた。以上のことは、文部科学省が示すキャリア教育で育成する基礎的・汎用的能力の4つの能力「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」を満遍なく育成したことを示していて、本校の高いキャリア教育の機能を可視化できたと考えている。

さて、本事業でこのような成果を創出できた背景には、専門高校が従来から持っている職業教育の機能に基づき、教員の研修と学校外部との連携の効果が現われたことにある。

専門高校は先人が築いた体系化された知識・技術を生徒に習得させるために、理論学習と実習を繰り返すことを重視してきた。本校もこのような教育活動が連綿と行われていて、教員にも一定の専門性が受け継がれている。一方、現行の学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて今年度実施した「探究学習教員研修会」においては、授業改善で求められる教員としての資質・能力の向上を目標に教員同士が学び合い、教育プログラムの内容充実と教育力向上を図った。

また、学校外部との連携については、水産・海洋を学ぶ生徒が地域や企業と協働して取り組むべき課題を設定し、連携先と同じ目標に向かって授業を進められたことに大きな教育効果があったと考えられる。近年、このような特定のテーマに関する関心や課題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を持続的な相互交流をとおして深めていく人々の集まり「実践コミュニティ」による人材育成方法が企業で注目されている。今後、本事業の学校外部との連携による教育効果は、「実践コミュニティ」の理論を学びながら向上させていく必要もあると考えられる。

以上のように、本事業3年間をとおして刷新された教育課程は大きな教育力を発揮できるようになった。教員同士が学び合い、より良質な教育を創っていこうとする学校文化が醸成されていくことで、自律的に教育課程が刷新され、どのような時代の要請にも応えられる人材育成が可能なる。専門高校が持つ不易な職業教育の機能を基盤に、新しい時代に即した教育の機能を取り込んでいくことで、地域に必要とされる専門高校としての存立を全うしたい。